

高麗時代蒲柳雜樹水禽文螺鈿描金香箱の現況、材質 および製作技法

著者	李 容喜, 大谷 育恵(訳)
著者別表示	YI Yong-hee, OTANI Ikue [trans.]
雑誌名	金大考古
号	78
ページ	173-188
発行年	2020-06-30
URL	http://doi.org/10.24517/00059505



高麗時代蒲柳雜樹水禽文螺鈿描金香箱の現況、材質および製作技法

イ ヨンヒ
李容喜

(国立中央博物館保存科学部 学芸研究官)

(大谷育恵 訳)

I. はじめに

国立中央博物館が所蔵している螺鈿描金蒲柳雜樹水禽文香箱は、いくつかの国内にある数少ない高麗時代の螺鈿漆器で、1910年の李王職博物館の時代に日本人の青木文七から購入したものである。この螺鈿香箱は蓋を深く被せた長方形箱型に作られており、正確な用途は不明であるが、発見当時花形の練香が内部に入っており、香箱と呼ばれるようになったものと推定される。螺鈿香箱は蓋(対の表)、身(対の内)、箱上に懸ける懸子(かけご)^(訳1)の3部分で構成されており、螺鈿、伏彩した玳瑁(たいまい)、金属線等を用いた平脱技法で柳、石、各種の花木、水禽、菊花と唐草蔓、牡丹等の文様を表現している。特に螺鈿文様周辺の余白に描金文様を加えて外観を華麗に装飾しており、これは他の高麗螺鈿漆器では容易に見られない特徴である。螺鈿香箱のこのような意匠と形態は、高麗時代は勿論、前後時期を合わせても唯一のものと言することができる。

しかしこの螺鈿香箱は高麗時代墓から出土した遺物で、発見当時から完全でない状態であり、残念ながら朝鮮戦争中に大破して現在は日帝強占期に出版された『朝鮮古蹟図譜』の写真を通してのみ全体的な形態を推測することができる。

国立中央博物館は2006年から蒲柳雜樹水禽文香箱の恒久的な保存方を策定するために、螺鈿香箱の損傷状態、材質、および製作技法等に関する調査に着手した。また2007年1月から2008年12月まで、韓国と日本の関係分野専門家らが集まって高麗螺鈿香箱の保存と復元をテーマとして韓日共同研究を推進した。

螺鈿香箱を対象とした材質および製作技法研究は、光学顕微鏡と走査電子顕微鏡(SEM)を利用した微視的調査を含み、X線透過撮影、無機質構成物に対するSEM-EDS分析と微小部蛍光X線分析、ATR-IRによる漆分析が主な内容であった。国立中

央博物館はこのような調査研究を通して螺鈿香箱の構造と形態、漆技法、螺鈿と玳瑁、金属線、描金文様など高麗螺鈿香箱の持っている重要な特徴を具体的に把握できるようになった¹⁾。

II. 螺鈿香箱の現状

蒲柳雜樹水禽文香箱は汚染と損傷の状態をみると、地中に長い間埋蔵されていた器物と考えられ、発見当時から木心は大部分腐ってなくなっており、漆皮のみ残った状態であったものと推測される。この螺鈿香箱は『朝鮮古蹟図譜』の写真を通して分かるように、蓋と身の大部分がすでに破損したり欠失したりした状態で、さらに朝鮮戦争中に損傷して700余点の大小破片に破損した。現在螺鈿香箱の破片は収縮変形によって縮んだり漆面に微細な亀裂が多数発生したりしており、材質が非常に脆弱で、外部の小さな衝撃でも簡単に損傷を受けてしまう状態である。また、相当数の螺鈿文様と玳瑁文様は脱落欠失してその痕跡のみ残っており、一部は土と汚染物で覆われており、細部形態が明確に認識されないものもある。また金属線で表現された文様は腐食が進んで錆に変化したり固有の物性を喪失したりしており、大部分が欠失している。漆表面に重ね描かれた描金文様は小川、花木の小枝、空を飛ぶ鳥など

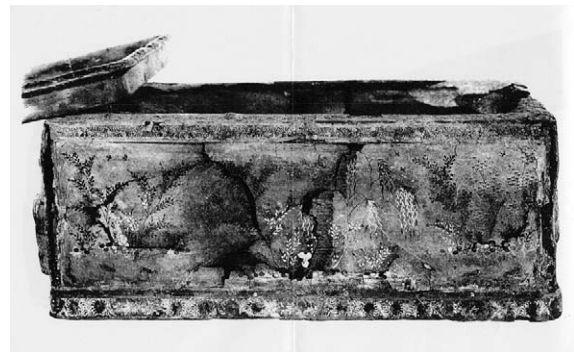


図1 螺鈿香箱 蓋(『朝鮮古蹟図譜』)

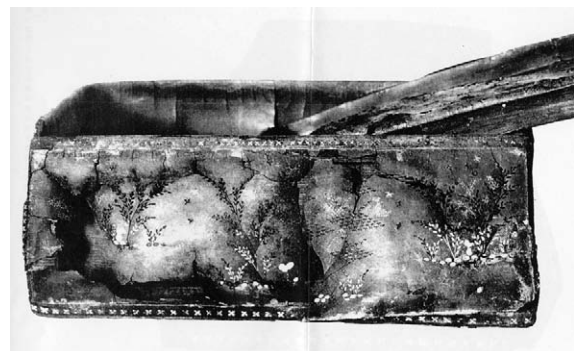


図2 螺鈿香箱 身(『朝鮮古蹟図譜』)

を表現したものとみられ、現在は大部分が薄れて正確な形態は分からないが、多数の痕跡が所々確認される(図 1,2)。

Ⅲ. 材質および製作技法の調査内容

1. 実測調査

螺鈿香箱の全体破損片を各部位別に分類整理し、長さ、幅、厚さなど寸法を計測し、それを『朝鮮古蹟図譜』に記録されている寸法と比較した。また連結部の細部形態を調査し、板材の接合方法を確認した後、全体破損片の状態を写真で記録した。

2. 高精細写真撮影

螺鈿香箱の現状を記録し、文様の種類と形態を把握するために文様の種類別に 1 倍、2 倍 [換算倍率 5 倍、10 倍] の高精細撮影を行った。(カメラ: Canon EOS 5D Mark II、レンズ: Canon MP-E 65mm)

3. X 線透過撮影

文様が残っている螺鈿香箱破損片の各部分を X 線透過撮影し、表に見えない内部の損傷状態、文様の形態と配置、木心板材の木目の方向、織物心の使用有無などを確認した。(機材: Softex X-ray K2、条件: 20Kv, 2 μ A, 1 min distance 100cm, film Agfa D7)

4. 実態顕微鏡調査および文様の計測

実態顕微鏡 (Laica MZ9.5, Laica M205A) を使用して、5 ~ 40 倍の倍率で螺鈿、玳瑁、金属線、描金文様の細部形態を確認し、そこから得られたデジタルデータを画像解析ソフトウェアで処理し、個別文様の細部寸法を測定した。(画像解析ソフトウェア: Olympus analysis 5)

5. 透過光および偏光顕微鏡調査

透過光と偏光顕微鏡の 50 ~ 500 倍倍率で漆塗膜の層状構造と構成物質、描金技法、木心に使用された木材の樹種、織物心の材料を調査した(機器: Leica DMLP)。そのために螺鈿香箱から脱落した 2 ~ 4mm の大きさの漆片と木片を透明なエポキシ樹脂で包埋した後、漆の一断面が明らかになるように細かく研磨した (Struers silicon carbide paper #500-#2400)。その後これを顕微鏡用スライドガラスに付着させた後、10 ~ 20 μ m の厚さの薄膜に加工したも

のを顕微鏡観察用資料として使用した。

6. 走査電子顕微鏡調査 (Scanning electron microscope)

先に製作した顕微鏡資料と螺鈿香箱から脱落した螺鈿と金属線を走査電子顕微鏡下で観察し、漆断面の層状構造と構成物質、螺鈿と金属線の加工痕跡、描金層金粉粒子の形態と分散状態、織物心の有無などを調査した。(機器: Hitachi SEM-3500, Japan)

7. EDS 搭載走査型電子顕微鏡分析 (SEM-EDS analysis)

走査電子顕微鏡に装着されたエネルギー分散型分析装置 (EDS) を利用して骨灰層の構成物質、金属線の材質を分析した。(機器: SEM-Energy Dispersive Spectroscopy, Kevex Superdry, USA)

8. 微小部蛍光 X 線分析 (μ -XRF analysis)

資料採取が困難であった^{たいまい}玳瑁の伏彩顔料と金属線の場合、微小部蛍光 X 線分析を通して細部を確認した。(機器: Potable μ -XRF Spectrometer, Art TAX, Rontec, Germany、分析条件: 500 μ A, 100 sec.)

9. ATR-IR 分析 (Attenuated total reflectance-Infrared analysis)

螺鈿香箱の製作に使用された漆の種類を明らかにするために、対照用漆試料を製作して螺鈿香箱の漆と対照用漆試料をそれぞれ ATR-IR で分析し、スペクトルの特徴を比較した。(機器: ALPHA-E (Bruker Co., Germany)、ATR 測定、ATR crystal type: ZnSe (Zinc selenide))

Ⅳ. 調査結果

1. 螺鈿香箱の大きさ

螺鈿香箱は蓋(対の外)と身(対の内、身中箱)、そして身中箱上に渡してある懸子^{かけご}で構成されている。蓋は高さ 112cm、長さ 293cm、幅 194cm で、下段側には幅 15mm、厚さ約 3mm の帯が重ね付けられて巡っている。身中箱は高さ 103cm、長さ 271cm、幅 171cm で、その上に渡し懸けられた懸子は高さ 22.7cm、長さ、幅は中箱と近似する範囲である。螺鈿香箱のこのような規格は、現在破片の実測データを土台に類推したもので、このうち中箱の高さ (10.3cm) を含むいくつかの部分は『朝鮮古蹟図譜』に記録された寸法の寸法をミリメートル単位に換算したものと近い(図 3,4)。

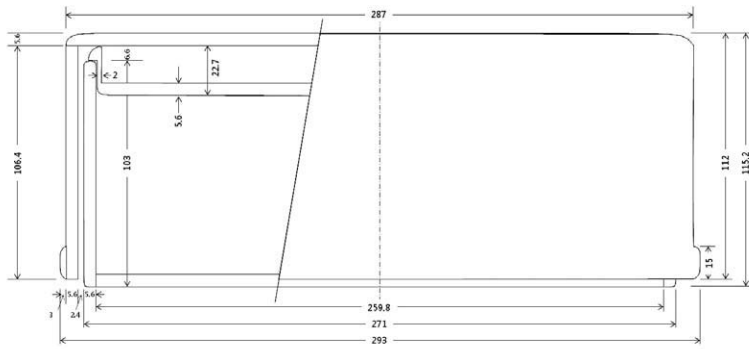


図3 螺鈿香箱の断面図（長軸面）

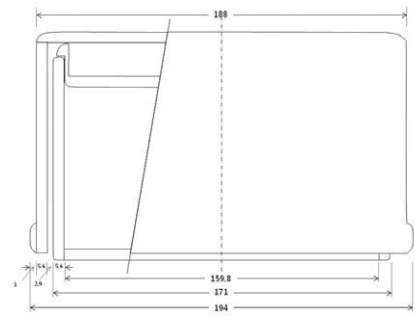


図4 螺鈿香箱の断面（短軸面）

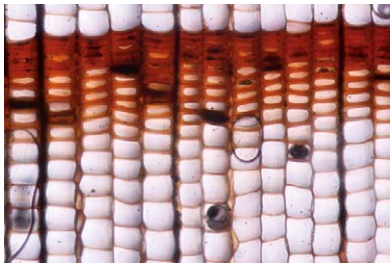


図5 木材横断面

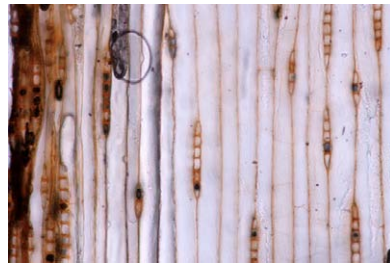


図6 木材接線断面



図7 木材放射断面

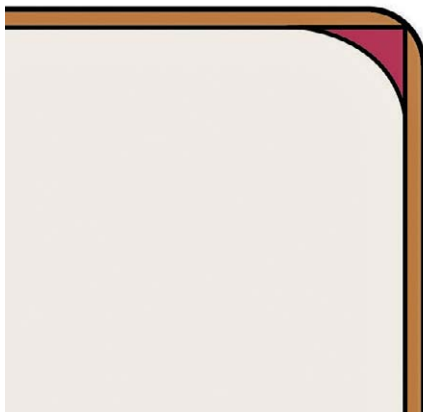


図8 木心の側面板材の結合構造

2. 木心の材料と組立方法

螺鈿香箱の木心には約4.4cmの厚さの針葉樹柁目板が使用されており、正確な木の種類は突き止めることができなかったが、放射線細胞でのみできており、スギ型の壁孔を持つ特徴を通してスギ、ヒノキ、またはモミ属に属する木と推定することができる(図5~7)。木心は側面の板材を角部分で接続させ、その内側に断面が三角形の角材をあてて連結した後、外(蓋)または下(身)を板材で塞ぐ方式で作られている。蓋の場合、側板上に天板を被せて木釘を打ち込んで組み立てたが、身中箱は組み立てた側板端に底板を合わせ付けた形態に製作されており、木釘の使用痕跡は見られなかった(図3,4,8)。

3. X線透過撮影の結果

X線透過撮影を通して、表からは良く見えない金属線と螺鈿、玳瑁文様、織物心、木目の方向、漆面に発生した微細亀裂等が明瞭に観察された(図9~14)。

4. 漆の種類と漆技法

1) 漆の種類

螺鈿香箱の漆資料をATR-IRで分析した結果、 $3600 \sim 3200 \text{cm}^{-1}$ からフェノール性水酸基(-OH)によって引き起こされた広い吸収帯、そして微弱ではあるがメチレン基のC-H伸縮振動に起因する $2900 \sim 2800 \text{cm}^{-1}$ での吸収帯が確認された。またC=C伸縮振動、芳香核の骨格振動、C=O伸縮振動等に起因するものとみられる $1730 \sim 1600 \text{cm}^{-1}$ 付近での広い吸収帯も現れた。その他に 1450cm^{-1} から見られる吸収帯はメチレン基に起因するもので、 990cm^{-1} の吸収帯は共役トリエン(conjugated triene)構造によるもので分析対象物が2量体以上の高分子物質であることが分かる。このような分析スペクトルは比較対照用漆資料と類似性が多くみられる。したがって螺鈿香箱にはウルシオールを主成分とする一般的な漆が使用されたものと判断される。一方で対照区に比べて各波長領域での吸収スペクトルがはっきりしていないものは、漆の劣化や汚染による

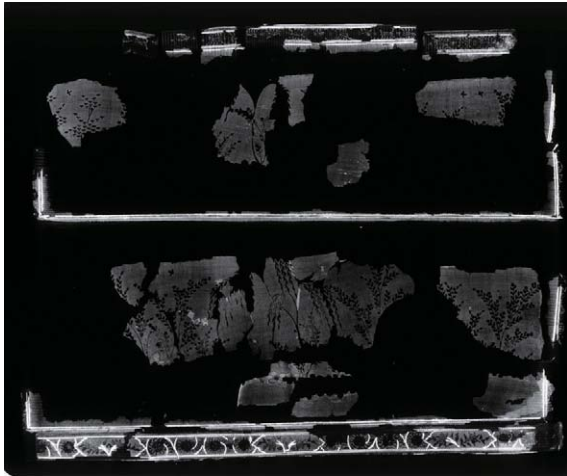


図9 蓋の前・後側面のX線写真

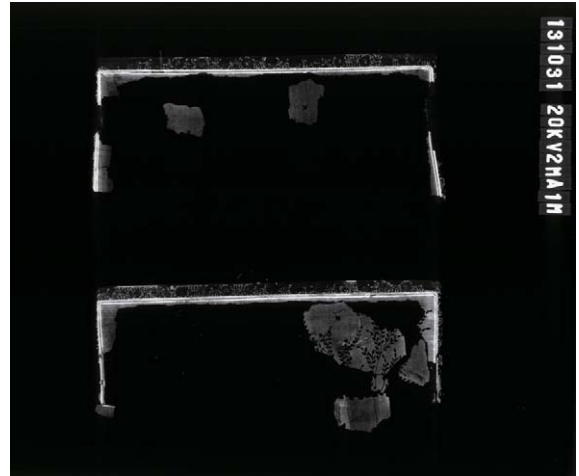


図10 蓋の左・右側面のX線写真

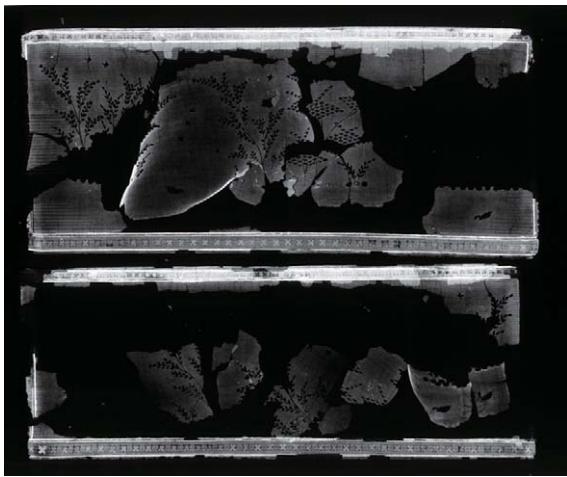


図11 中箱の前・後側面のX線写真

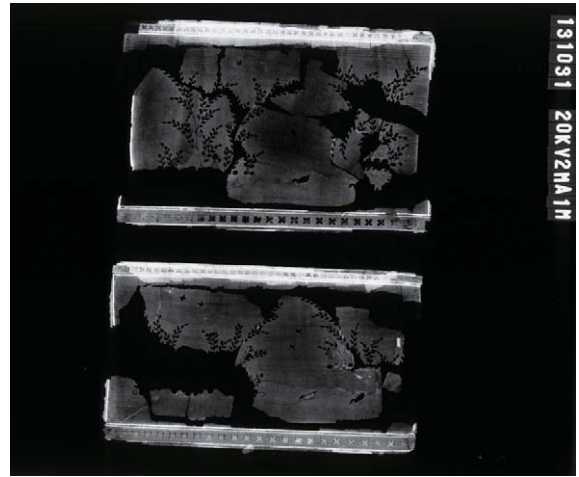


図12 中箱の左・右側面のX線写真



図13 懸子の文様面のX線写真

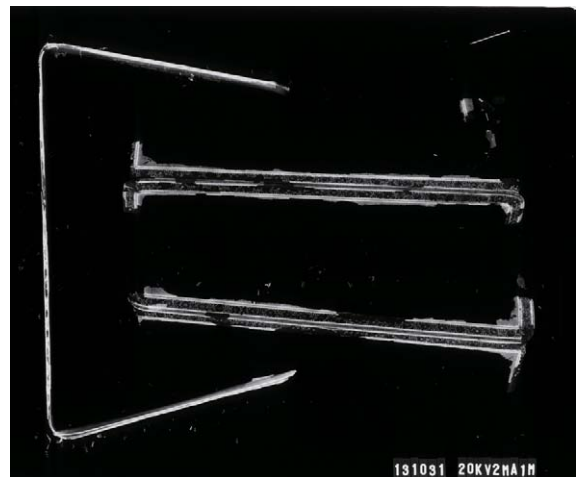


図14 蓋枠のX線写真

影響と考えられる(図15,16)。

2) 漆技法

螺鈿香箱は木心表面に漆を染み込ませて塗り(下塗り)、織物で被覆した後にその織物心上に骨灰塗りと上塗り漆を施している。漆の全体厚は500~600 μm で、このうちほぼ半分は骨灰層が占めている。

骨灰の材料としては骨粉と漆が使用されており、骨粉粒子の大きさは一定ではなく、大部分が110 μm 以下の不定形である。織物心には平織りの絹織物が使用されており、織の密度は28 \times 20/cmで、約300 μm の厚さの織物層を形成している。骨灰層上に塗られた上塗り漆の厚さは約30~40 μm の範囲であ

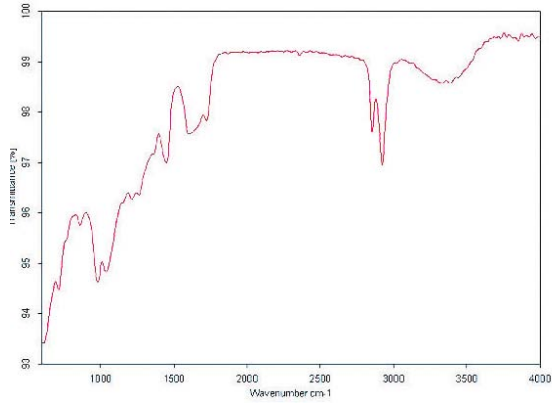


図 15 対照区漆資料（骨灰+日本産生漆+精製漆）の赤外線吸収スペクトル

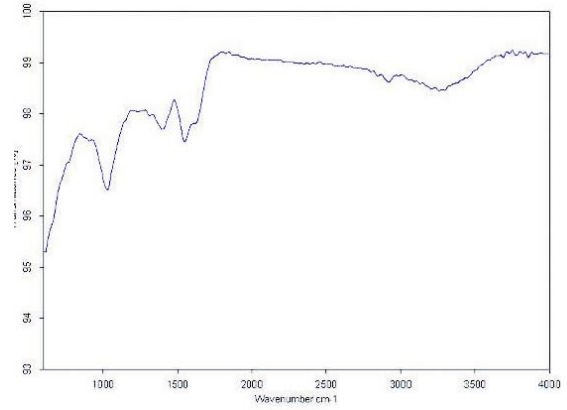


図 16 螺鈿香箱漆の赤外線吸収スペクトル

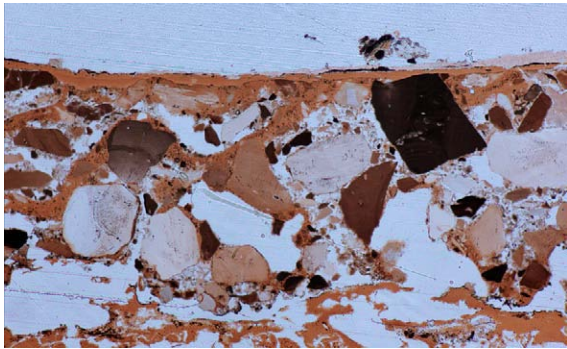


図 17 金描部分の漆塗膜断面（透過光）

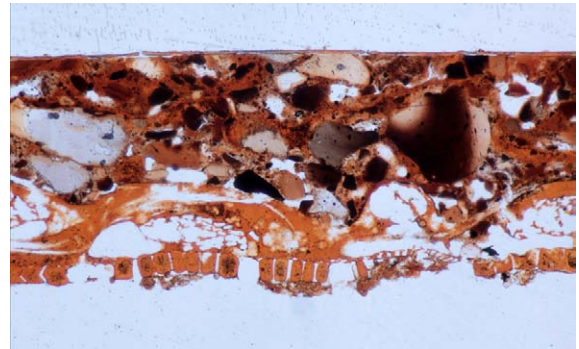


図 18 懸子底の漆塗膜断面（透過光）

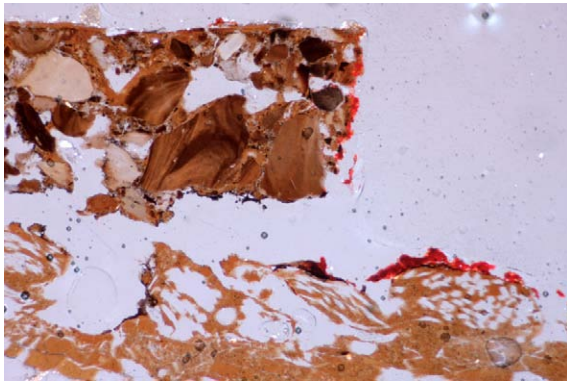


図 19 玳瑁文様周辺の漆塗膜断面（透過光）

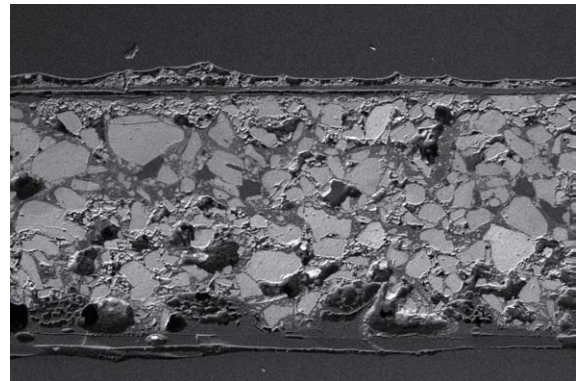


図 20 懸子の漆塗膜断面（SEM）



図 21 織物心の織の状態

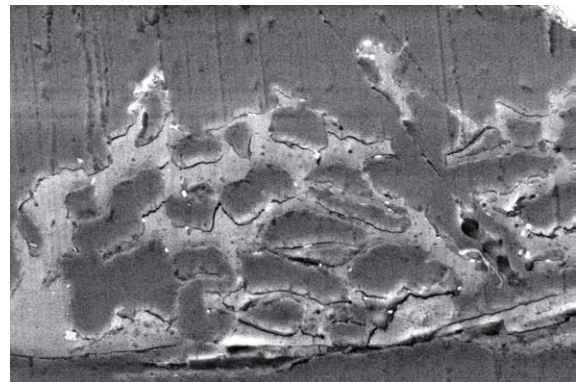


図 22 織物の繊維断面（SEM）

り、部位によって違いがあるが、2～3回かけて透明な漆を薄く塗って仕上げたことが明らかになった(図17~22)。

5. 文様の種類および配置

高麗螺鈿香箱からは、水辺の柳、各種の花木、石、水禽と空を飛ぶ鳥、唐草、蔓と菊花、牡丹、風車あるいは十字形の花など、多様な文様を見出すことが



図 23 柳



図 24 花木 1



図 25 花木 2



図 26 花木 3



図 27 木



図 28 石とネコヤナギ



図 29 石と花木



図 30 描金の花木分枝、鳥

できる(図 25-56)。これら文様は螺鈿香箱の前・後または左・右側面に対称の構図で配置されていたものとみられる。このうち花木、石、水禽と鳥は蓋と身の両側共に表現されており、花木は種類にした

がって葉の形が異なっている(図 57~65)。水辺の柳、唐草蔓と菊花が組み合わさった菊唐草文は蓋でのみ確認されており、柳文様は蓋の側面、菊唐草文は蓋の上側と側面の角部分、そして下端部に付けら



図 31 菊唐草、金属線



図 32 牡丹、金属線



図 33 水禽、石、金描の小川



図 34 空を飛ぶ鳥



図 35 風車形の花(中箱の上部枠)



図 36 風車形の花(中箱の下端枠)



図 37 菊唐草(蓋の上部枠)



図 38 懸子底の菊花

れた帯状部分を装飾している。また下端帯部分の菊唐草文の中間部分には牡丹文様が配置されている(図 54~56)。風車形(X字形)の花形は中箱の上・下枠と側面角部分に連なって施文されており、下枠の文様はその他の部分と大きさや形態が異なっている(図 61,62)。菊花文様は懸子の底と枠部分でみられ、懸子の底は茎の端に花の付いた菊花文を格子形に配置し、枠部分には簡略化した菊花と茎を表現している。現在底面の菊花文様はその文様と配置状態が日本東京国立博物館所蔵の毛利家伝来菊花螺鈿経箱と非常によく似ている(図 66,67)^(訳?)。



図 39 懸子の枠の菊花



図 40 柳



図 41 花木 1
(茎 W0.3mm; 葉 L2.6mm, W1mm)

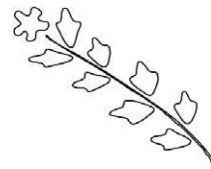


図 42 花木 2
(花 φ2mm; 葉 L1.9mm, W0.9mm)

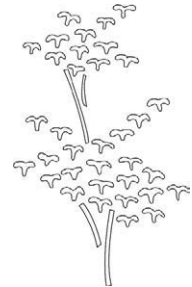


図 43 花木 3
(葉 L2.8mm, W0.8mm)

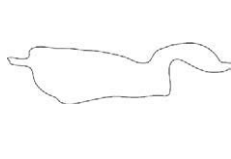


図 44 水禽
(L9.1mm, H2.7mm)

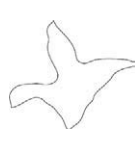


図 45 鳥
(L4mm, H3.2mm)

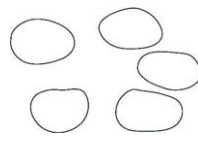


図 46 石 1
(L3mm, H2mm)

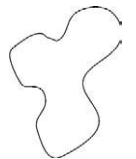


図 47 石 2

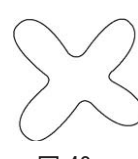


図 48 風車形の花 (小)
(2.8 × 2.6mm)

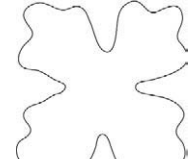


図 49 風車形の花
(4.6 × 4.6mm)



図 50 牡丹、菊唐草文 (唐草蔓の葉 L3.3mm, W0.73mm)



図 51 菊唐草文 (花 φ6.4mm)



図 53 懸子の枠の菊花 (花 φ3.7mm)



図 52 懸子の菊花
(花 φ8.2mm;
葉 L2.4mm, W0.7mm)



図 54 菊唐草文 (蓋下端帯)



図 55 菊唐草文 (蓋上端角)



図 56 菊花花芯

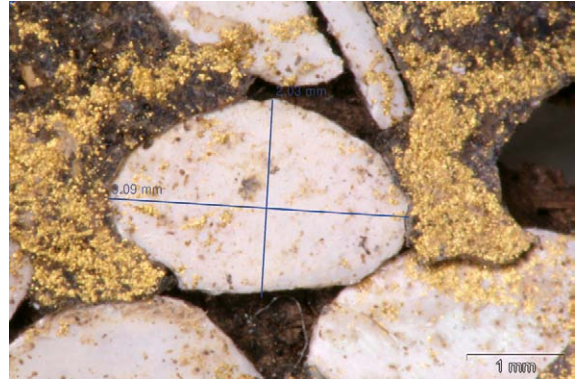


図 57 石



図 58 水禽



図 59 描金の鳥



図 60 螺鈿の鳥 (螺鈿脱落)

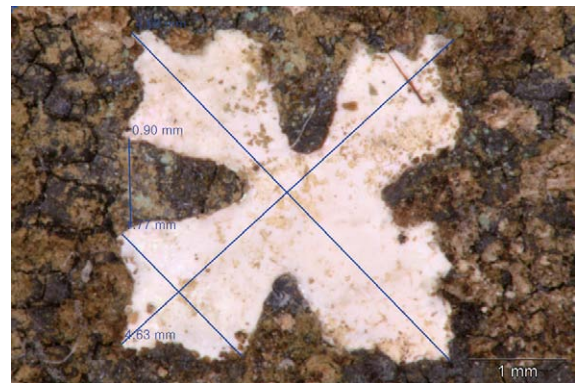


図 61 風車形の螺鈿文様 (大)

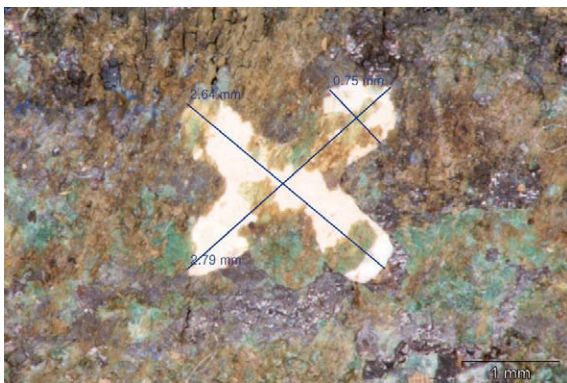


図 62 風車形の螺鈿文様 (小)

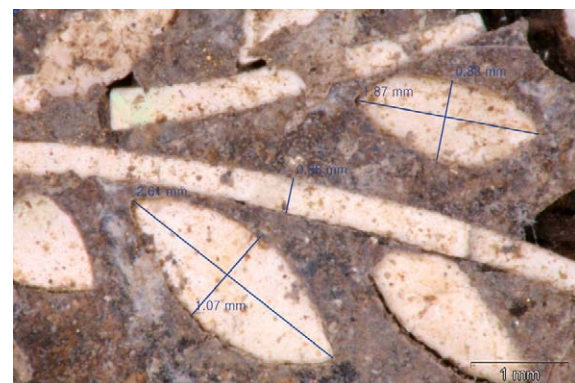


図 63 花木の葉と茎



図 64 葉（螺鈿脱落）



図 65 花木の花と木（螺鈿、玳瑁脱落）



図 66 懸子の底の菊花（螺鈿脱落）

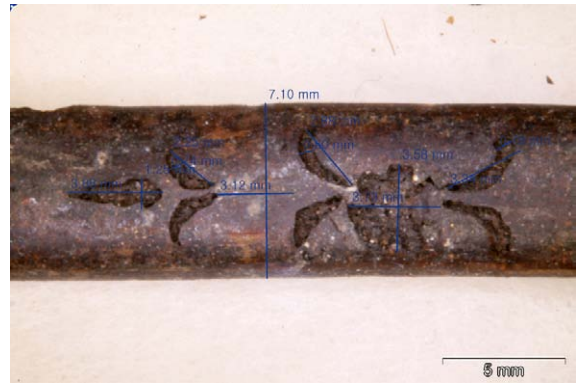


図 67 懸子の枠の菊花（螺鈿脱落）



図 68 2本を編んだ金属線



図 69 螺鈿文様の断面

6. 螺鈿文様

螺鈿文様は蓋の場合、柳と石、花木、水禽、下段側に巡っている帯部分の牡丹と唐草蔓の葉に使用されており、身はこれら文様の他に上・下枠と側面角の風車形花文様、そして懸子は菊花等の表現に利用されている。これら螺鈿文様は0.3mm内外の厚さに薄く加工した貝（アワビ貝と推定）が使用されており、当時は現在のような電動鋸がなかったので、薄い貝を小刀や彫刻刀を利用して大体の形にカットした後、やすりで整えて製作する方法や文様の外郭線に沿って錐で点々と孔をあけて切り取った後、切断面を整えて文様の形に完成させる方法が使われた

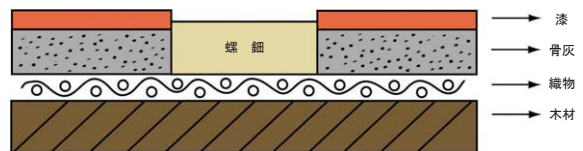


図 70 螺鈿文様部分の断面模式図

ものと考えられる。また螺鈿文様周辺漆面の顕微鏡調査から、螺鈿文様直下と織物心間に厚い骨灰層がみられず、さらに螺鈿文様が脱落した部分に織物心そのまま露出している状態で見えているので、螺鈿漆器の製作工程上、まず布目を埋めた織物心表面に骨灰を塗らない状態で螺鈿文様を接着したものと考えられる（図 69~78）。



図 71 花木茎の螺鈿



図 72 花木茎螺鈿の側面加工痕跡



図 73 風車形の花文様



図 74 風車形の花文様側面

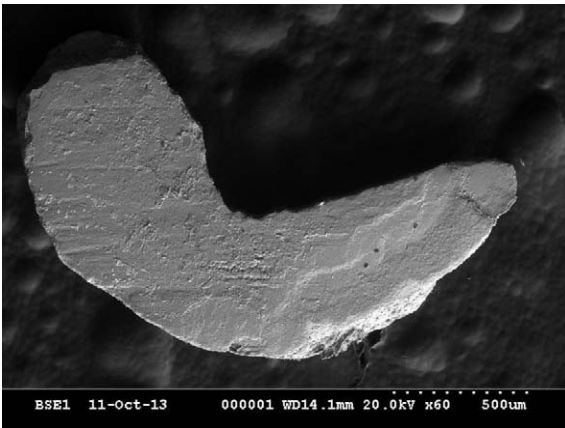


図 75 唐草蔓葉螺鈿の上面 (SEM)

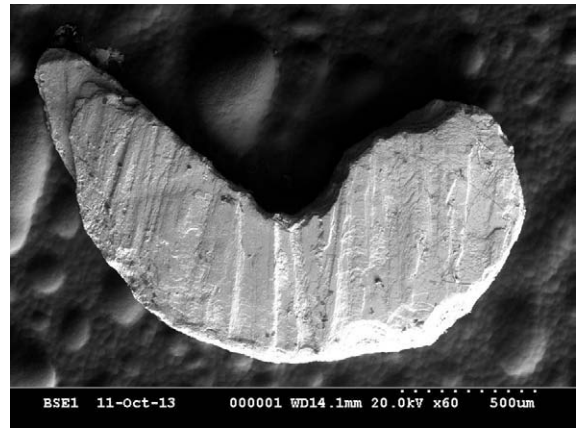


図 76 唐草蔓葉螺鈿の背面 (SEM)

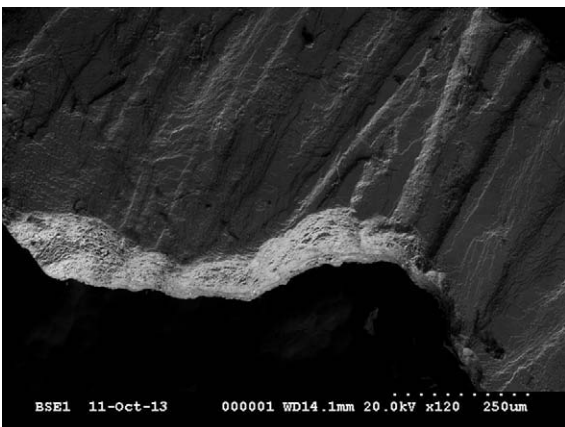


図 77 唐草蔓葉螺鈿の細部 (SEM)

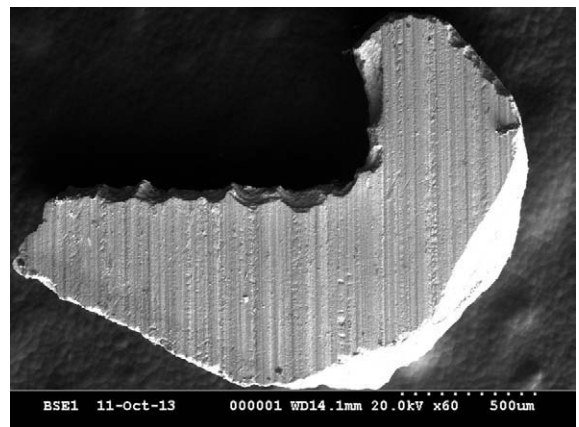


図 78 試料螺鈿の形態 (SEM)

7. 玳瑁文様

玳瑁文様は着色漆で伏彩した玳瑁が使用されており、玳瑁で表現された文様は蓋と身の花木端に付いた星形の花、蓋の枠と下端帯部分の菊花、懸子の底を装飾する菊花花芯で見ることができる。蛍光 X 線分析の結果、菊花の黄色花弁には雄黄 (石黄とも: As_2S_3)、赤い花芯には辰砂 (HgS) が彩色漆の顔料に使用されており、懸子の底に表現された菊花の場合、花弁は螺鈿でその中心の花芯は黄色顔料である雄黄で伏彩した玳瑁が使用されたことが明らかになった。この他に、花木の端に付いた星形の花は大部分

赤色の辰砂が伏彩用顔料に使用されており、黄色にみえる一部花文様は雄黄で伏彩した玳瑁が使用されている (図 80,81)。



図 79 蓋の上側枠の菊花玳瑁文様

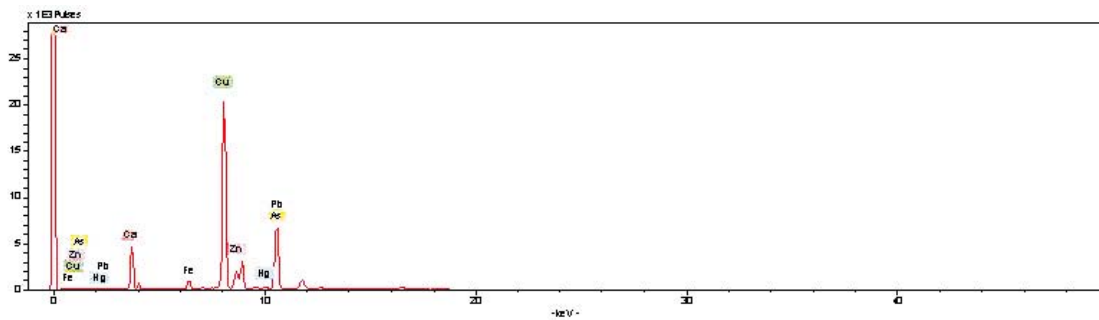


図 80 玳瑁文様黄色部分の蛍光 X 線分析によるスペクトル (主成分: As)

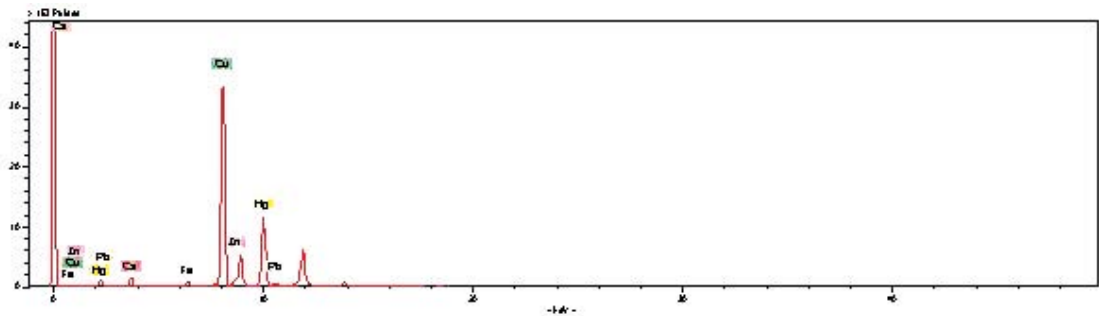


図 81 玳瑁文様赤色部分の蛍光 X 線分析によるスペクトル (主成分: Hg)

8. 金属線文様

螺鈿香箱に使用された金属線は単線と 2 本を 1 本に捻じって作ったものの 2 種類に区分され (図 68)、蓋と身の枠および側面隅の文様境界線、蓋下端帯部分に見られる唐草蔓の茎、牡丹の茎と眼象形

態の外郭線、懸子の菊花茎などの表現に使用されている (図 82~89)。蛍光 X 線ならびに SEM-EDS 分析の結果、0.5 ~ 0.6mm の厚さの単線は錫 (Sn) と鉛 (Pb) の合金で、金属板を細く切り出して鍛造して作った金属線である。2 本を捻じって作った金属



図 82 2 本を捻り合わせた金属線



図 83 2 本を捻り合わせて 1 本になった金属線



図 84 2本を撚り合わせた金属線 (SEM)



図 85 2本を撚り合わせた金属線 (SEM)

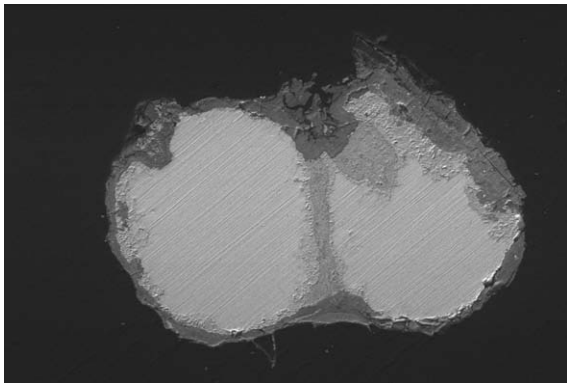


図 86 2本を撚り合わせた金属線 (SEM)

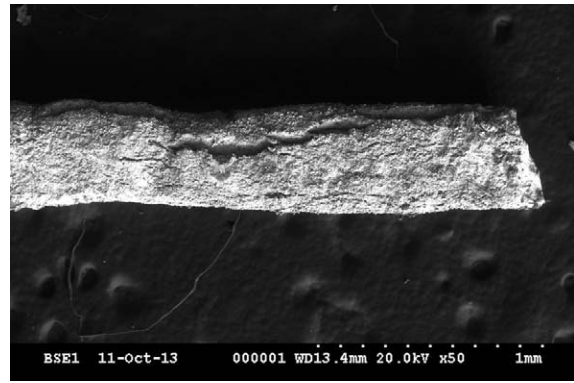


図 87 鍛造金属線の側面 SEM 撮影

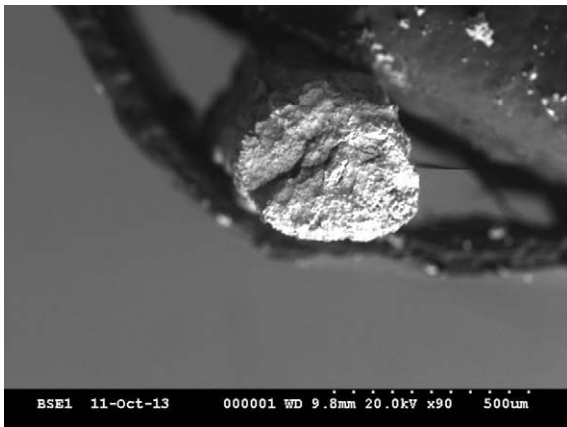


図 88 鍛造金属線の切断面 SEM 撮影

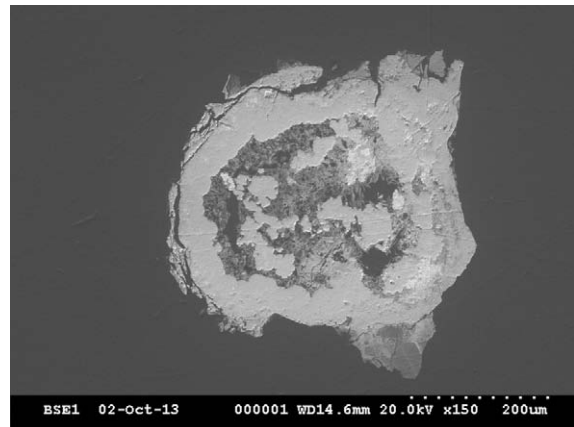


図 89 鍛造金属線の研磨断面 SEM 撮影

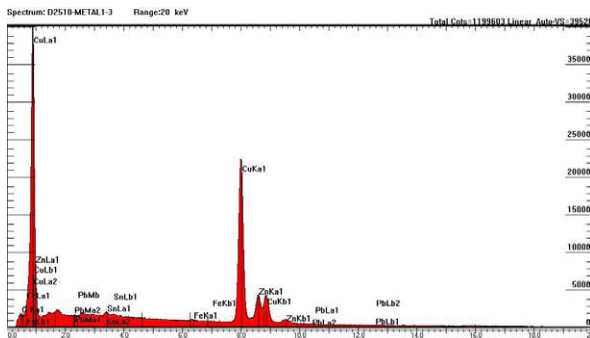


図 90 2本を撚り合わせた金銅線の SEM-EDS 分析スペクトル (Cu, Zn)

成分 (wt%)					
O	Fe	Cu	Zn	Sn	Pb
3.92	0.32	71.08	16.93	0.77	6.95

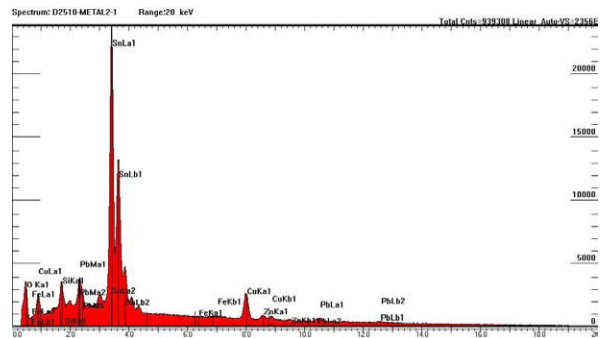


図 91 金属製単線の SEM-EDS 分析スペクトル (Sn, Pb)^(註3)

成分 (wt%)							
O	Sn	Pb	Si	Ca	Fe	Cu	Zn
20.67	48.87	17.43	1.23	0.48	0.12	8.93	2.26

線は銅 (Cu) と亜鉛 (Zn) を合金した金銅製であり、0.3mm 程度の一定の太さの丸線 2 本を拵じて製作したものと確認された (図 90,91)。

9. 描金文様

描金文様は花木の分枝、石周辺を流れる小川、空を飛ぶ鳥などを表現している (図 92,93)。調査の



図 92 描金文様の花木分枝



図 93 描金文様の鳥

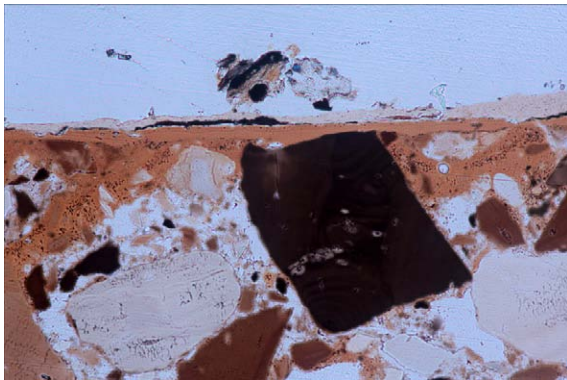


図 94 描金部分の漆断面 (透過光)

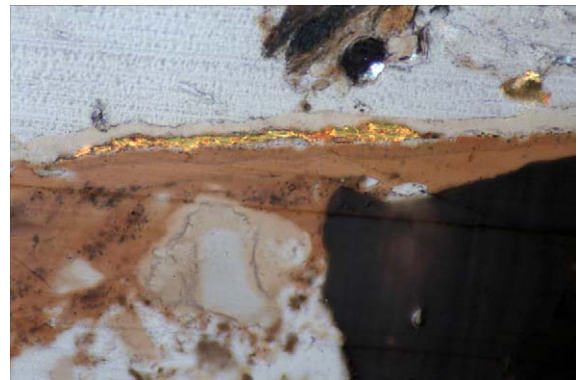


図 95 描金部分の漆断面 (落射照明)

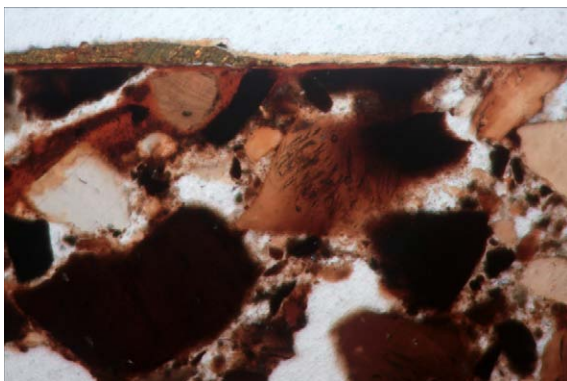


図 96 描金部分の漆断面 (落射照明)

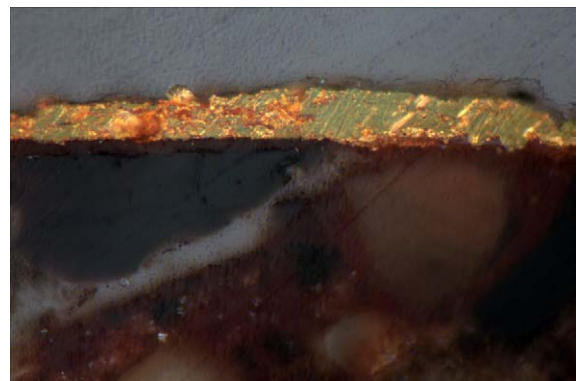


図 97 描金部分の漆断面 (落射照明)

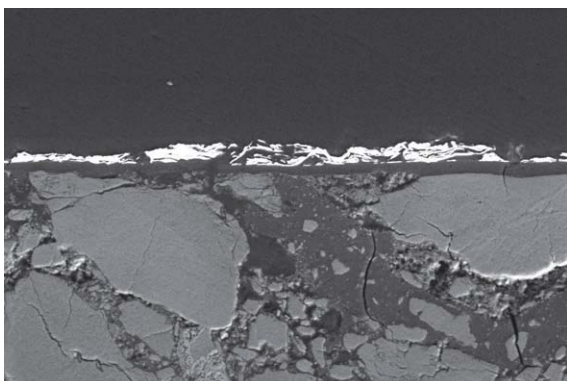


図 98 描金部分の漆断面 (SEM)



図 99 描金部分の漆断面 (SEM)

結果、高麗螺鈿香箱で見られる描金文様には金箔を粉末状態に粉砕して作った金粉が使用されたものと確認された(①膠液を塗った磁器に金箔をつけて手でこすって粉砕する方法(中国王槩の『芥子園画伝』巻1, 設色各法); ②金箔を粉筒に入れて振る方法)。また透過光、落射型、ならびに偏光顕微鏡による調査から、金粉粒子間の空いた空間や周辺に漆と考えられる膠着剤が確認されなかったことからみて、金粉を漆に混ぜて塗ったり、漆で描いた文様上に金粉を振りかけて固定したものは見られなかった(図94-103)。したがって、高麗螺鈿香箱の描金文様は金粉を阿膠や魚膠の膠液に混ぜて彩色したり、金粉を乾性油に混合して彩色したものと推測される。

V. おわりに

高麗時代の蒲柳雜樹水禽文螺鈿香箱は木心苧皮漆器で製作されており、針葉樹柁目板で作られた木心に絹織物心を張り、その上に骨粉を混ぜた骨灰を塗った後、さらに漆を塗ったものと判明した。螺鈿文様は0.3mm前後の厚さのアワビ貝(推定)を錐や小刀を使用して1つ1つ切り取る方式で製作したものとみられ、これら螺鈿と共に辰砂と雄黄で伏彩した玳瑁が文様表現に使用されている。螺鈿香箱の枠と角部境界線、唐草蔓、懸子の菊花茎等を表現するのに使用された金属線の形態は2種類であることが明らかになった。このうち鍛造方法で作られた単線は錫(Sn)と鉛(Pb)の合金であり、また扱った形態の線は銅(Cu)と亜鉛(Zn)合金の黄銅製丸線2本を利用して作ったものである。螺鈿香箱の華やかさを加える描金文様は金箔を粉末形態に粉砕した後、阿膠や魚膠に混ぜて文様を描く技法で、あるいは乾性油に金粉を混合して彩色した技法を使用したものと推定される。

以上の結果を通して分かるように、国立博物館所蔵の高麗時代螺鈿香箱の製作には、当時活用可能な全ての技術と材料が使用されたものと見られる。この螺鈿香箱は破損して残片の形態で残っている状態のものであるが、唐代に使用されたレベルの高い木漆工芸技術の重要な証拠が遺存する遺物として保存価値が高いと言える。特に今回の調査研究結果は、蒲柳雜樹水禽文螺鈿香箱を含む高麗螺鈿漆器の保存と復元のための資料として有用に活用することができるだろう。ただし現在まで正確に確認されていな

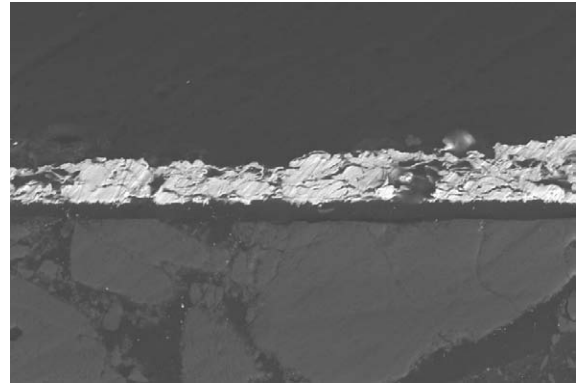


図 100 描金部分の漆断面 (SEM)

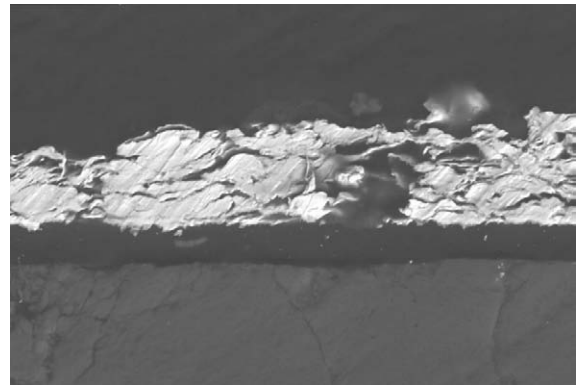


図 101 描金部分の漆断面 (SEM)

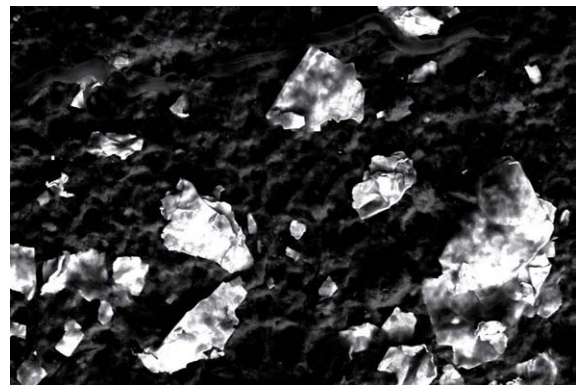


図 102 描金部分の漆断面 (SEM)



図 103 描金部分の漆断面 (SEM)

い部分、例えば螺鈿香箱の心に使用された木材の樹種、金属線の材料に使用された異種金属の合金比率、描金表現に使用された金粉の製造方法と彩色技法、

螺鈿文様に使用された貝の種類と文様加工に使用した道具等に対しては、詳細な研究が行われる必要があると考える。

訳注：

- 訳 1) 懸子とは、ある箱の身の縁にかけて、その中にぴったりとはまるように作られた箱。
- 訳 2) 重要文化財指定名称は「菊花文螺鈿箱」。資料はの国立文化財機構の "e- 國寶" で公開されており、細部を拡大して確認することが可能である。[文化財オンライン (e- 國寶へのリンクあり)]: <https://bunka.nii.ac.jp/heritages/detail/131067/2>
- 訳 3) 原文ではキャプションが図 90 と同じく「2 本を撚り合わせた金銅線の…」となっているが、誤りであるため訂正した。また、図も図 90 と重複しているため、著者確認の上差し替えている。
- 訳 4) 論文名は誤植により「雑」が抜けている。名称は本文文頭で示されているように「나전묘금포류잡수금문향상」であり、訂正した。

註（参考・引用文献）：

- 곽대웅 1984 『고려나전칠기 연구』 미진사. [『高麗螺鈿漆器研究』 미진사]
- 李容喜이용희 1994 「통일신라시대 칠기의 재질과 기법」 『한·일보존과학 공동연구 자료집』. [「統一新羅時代漆器の材質と技法」 『韓・日保存科学共同研究資料集』]
- 李容喜이용희 1996 「조선시대 나전칠기수리」 『보존과학학회지』 5. [「朝鮮時代螺鈿漆器の修理」 『保存科学学会誌』 5]
- 李容喜이용희・金庚洙김경수・兪惠仙유혜선 2003 「나전칠기의 칠기법 조사 (1)」 『박물관보존과학』 4, 국립

- 중앙박물관. [「樂浪漆器の漆技法調査 (1)」 『博物館保存科学』 4, 国立中央博物館]
- 윤원선 2004 『불화의 금니・금박표현기법 연구』 용인대학교 예술대학 석사학위 논문. [『仏画の金泥・金箔表現技法の研究』 龍仁大学校芸術大学修士論文]
- 곽대웅・황지현 2006 「한국의 나전칠기」 『나전칠기: 천년을 이어온 빛』 특별전 전시도록, 국립중앙박물관. [「韓國の螺鈿漆器」 『螺鈿漆器: 千年を受け継いだ光』 特別展示図録, 国立中央博物館]
- 李容喜이용희・金庚洙김경수・兪惠仙유혜선 2009 「다호리 출토 칠기유물의 칠기법 특징 연구」 『고고학지』 특집호, 국립중앙박물관. [「茶戸里出土漆器遺物の漆技法特徴の研究」 『考古学誌』 特集号, 国立中央博物館]
- 李容喜이용희・서정호 2010 「고려시대 이전에 제작된 출토 고대칠기의 칠기법 연구」 『문화사학회지』 33. [「高麗時代以前に製作された出土古代漆器の漆技法研究」 『文化史学会誌』 33]
- 박정혜・李容喜이용희 2013 「고려시대칠기에 나타난 묘금기법연구」 『박물관보존과학』 14, 국립중앙박물관. [「高麗時代漆器に表れた描金技法研究」 『博物館保存科学』 14, 国立中央博物館]

原載：

이용희 2014 『高麗時代蒲柳雜樹水禽文螺鈿描金香の現況、材質 및 製作技法』 (訳4 『東垣學術論文集』 第 15 輯, 国立中央博物館・韓國考古美術研究所: 208-236.

公開先（韓国国立中央博物館 HP）：

https://www.museum.go.kr/site/main/archive/periodical/archive_6247

本号の企画と構成について

大谷育恵・岡田文男・李容喜

I. 本号の企画について

大谷育恵と岡田文男は、公益財団法人住友財団の 2019 年度「海外の文化財維持・修復事業助成」を受給し、2020 年 4 月よりモンゴル国の匈奴墓で出土した漢代の有銘漆器 2 点の調査研究と修復を実施する予定である。漢代漆器に対する顕微鏡観察の

既存報告としては、東京大学が所蔵する樂浪漆器は報告が出ており [岡田 1995]、また中国の漢墓出土資料に対する実施例も報告書 [岡田 2009] 中で発表されている。匈奴墓出土の資料についても、筆者らは 2018 年度にツアラム 7 号墳の資料に対して調査を実施しており [Okada 2019; Otani 2019]、今後も住友助成事業を通じてさらなる調査事例の積み重ねができるものと考えている。

一方で、著者らが先行研究について情報共有をする中で気になったのが韓半島の研究状況である。韓国においては戦前の発掘調査で出土した樂浪漆器